

「足が好きなようにしてる」と記述する左片麻痺者の歩行改善を目指して

○磯田 真里奈¹⁾ 宮城 大介²⁾ 内倉 清等³⁾

- 1) リハビリテーションセンター熊本厚生会病院
- 2) 青磁野リハビリテーション病院
- 3) リハビリ特化型デイサービス繋

【はじめに】

各知覚は注意を向けると認識できるが、知覚を情報として認識できず運動主体感の低下が生じ分廻し歩行を呈していた症例に対して、情報器官としての身体への関わりや知覚情報を手掛かりとして身体の認識の改善を図ったことにより歩行の改善を認めた症例を報告する。

【症例】

60歳代男性。右内包後脚から放線冠のラクナ梗塞。8病日目に当院に転院。左下肢は軽度の麻痺や、足クローヌスの出現、座位では足趾の異常な放散反応が出現し、知覚は圧覚に関して誤認することがあったが、その他は注意を向けると知覚可能。入院時は分廻し歩行を呈し「足が遠回りしてるのは分かるけど、どうしていいか分からない、足が好きなようにしてる」と運動主体感の低下を示す記述をされる。10m歩行試験では独歩で8.7秒であったが、クリアランスが低下していた。

【病態解釈】

検査上では知覚を認識できていたが、その知覚を情報として捉えていないことや、知覚の各要素間の関係性が構築できないことで運動主体感の低下が生じ、日常生活において特異的病理が出現していると考えた。

【訓練及び経過】

足底での表面素材識別課題や関節の位置関係の認識課題で、身体内部の情報構築を行い「足の裏の感覚が大事なのか」等の記述や、床と足部との相互作用の情報構築課題で、身体外部の情報構築を行い「最後（爪先離地）の力の抜け具合が大事」等の記述が得られた。また、訓練では損傷以前の行為との比較を行っていった。結果、症例から歩行について「霜柱を踏むときの感じ」と記述の変化があり、入院時の記述にあったコントロールできないという足の捉え方から、自己の身体によって感じられるものという記述に変化した。外部観察としては分廻し歩行の改善やクリアランスも保たれ、10m歩行試験では7.3秒と改善した。

【考察】

ニューロリハビリテーションの研究によると、運動の意図によって出現する遠心性コピー情報と実際の感覚フィードバック情報が一致する事によって運動主体感が生じると考えられており、その一致が失われると運動主体感の低下や運動制御に影響が起ることが示唆されている。症例においては訓練を通して受容表面として身体を認識し、情報器官としての身体への関わりや知覚情報を手掛かりとした身体の認識の経験をしたことで、運動主体感が生じ歩行の改善に繋がったと考える。

【倫理的配慮】

本人に口頭及び書面で十分に説明し、同意を得た。